HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	“Babylon Revisited”における死者の終わりなき再訪
著者	松浦，和宏; MATSUURA，Kazuhiro
引用	北海学園大学学園論集(193)：101-109
発行日	2024-03-27

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

“Babylon Revisited”における死者の終わりなき再訪

松　浦　和　宏

はじめに

F. Scott フィッツジェラルドの短編小説“Babylon Revisited”は，フィッツジェラルド作品における最高峰の短編小説の一つとして高く評価されている。この物語は，過去と死者という普遍的なテーマを軸に，主人公 Charlie Wales が抱える内面の葛藤と，それが物語全体に及ぼす影響を描いている。本論文では，“Babylon Revisited”における過去と死者が持つ推力が物語に果たす役割を掘り下げ，主人公の心情や行動にどのように影響を与えているかに焦点を当てたい。

1　反復する死者

フィッツジェラルドの“Babylon Revisited”は，批評家から高く評価されている。これまでの批評は，この作品をフィッツジェラルドの最高傑作の一つと位置づけてきた。例えば Calros Baker は，“It is probably his best”(269) と評し，Don Noble は，“Babylon Revisited”を“His best story”(4) と呼んでいる。Rose Adrienne Gallo は“‘Babylon Revisited’ is Fitzgerald’s masterpiece of short fiction. The story is perfect in plot, tone, atmosphere, dialogue, and characterization. Its thematic complexity is superbly interwoven with plot and structure. With good reason “Babylon Revisited” ranks high among the finest short stories of the twentieth century”(105) と評価している。Bryant Mangum も，この作品を“Fitzgerald cannon”(96) と評価し，“first-rate, popular magazine piece as well”(96) と述べている。また，William A. Fahey もこの作品をフィッツジェラルドが生み出した最高傑作の 1 つだとしている(137)。さらには，Alice Hall Petey からの評価も極めて高い(189)。しかし，その一方で，この物語のテーマである過去と主人公の関係については，これまでに十分な分析が行われて来たとは言えない[1]。多くの批評は，主人公 Charlie を苦しめ，娘との関係の再構築を妨げる障害として過去を認識している。その反面，過去が持つ意義に

[1] Carl D. Malmgren によれば，これまでの批評の関心は，主に Charlie の心境の変化，彼が改心したのかに集約されるという。つまりは過去と現在の Charlie の変化が重要視されているという。しかし本論は，この物語を包括する過去のテーマについて論じたい。後述するように，この物語において過去や死者が担う役割は大きく，これらがどのように物語に影響を与えているかに着目することは，この物語の枠組みを理解するにあたって大変重要であろう。

ついての議論は不足している。Robert Sklar が述べているように，Charlie は「過去の囚人」(302) である。また，Mangum が指摘するように，株式市場の崩壊とともにアルコール依存症に陥り，娘の親権を喪失した Charlie の前に，過去の亡霊たちが立ちはだかるように描かれている。このように，未来へ向かう Charlie にとっての障害として過去が登場している。

> In Charlie Wales, Fitzgerald creates a character whose future, in spite of his heroic struggle, is prescribed by his imprudent past. He is destined to be haunted by reminders of his early life embodied by Lorraine and Duncan; to be judged for them by the Marion of the present who, like Charlie's conscience personified, are disgusted by his past and demand punishment; and to be denied, for his penance, any right to fill the emptiness of his life with Honoria, the only meaningful thing left.(96)

Gallo も同様の指摘をしている："Duncan and Lorraine are there, ghosts from the past to haunt his present"(103)。Charlie の人生を侵食し，彼の未来と幸福を阻害するネガティブな存在として過去が描かれている。

しかし，過去が Charlie にとって暗い存在であるならば，なぜ彼は過去を完全に拒絶しなかったのか。この疑問は，物語内で彼が抱えている矛盾を浮き彫りにする。そこで，まずは物語の中で過去を最も象徴的に表す Duncan Shaeffer と Lorraine Quarrles に焦点を当てたい。Duncan は Charlie の大学時代の級友であると同時に，共に放蕩の時代を生きた間柄，Lorraine はかつて Charlie と共にパリを遊び歩いた関係にあった。彼らは，過去から立ち直ろうとしている Charlie に執拗に付き纏い，彼の居場所を突き止めようとする。Charlie は彼らを疎ましく感じつつも，完全には拒絶できない。そして Charlie が娘の親権を取り戻す可能性が高まった瞬間に突如として彼らは現れ，その登場が物語の展開に極めて大きな影響を与えている。彼らは，過去の亡霊，つまり死者として Charlie の前に立ちはだかり，過去に対する彼の葛藤を表現している。Richard Lehan も指摘している通り，彼らは過去そのものであり，現在の Charlie を飲み込もうとしているのである。

> The loss of this vitalized self is part of something larger, as we clearly see in "Babylon Revisited," where the dissipation of Charlie Wales cannot be separated from the spirit of the times. Throughout Fitzgerald's fiction the past has a way of consuming the present; here it follows Charlie like a ghost in the persons of Duncan Shaeffer and Lorraine Quarrles, with whom he had once lived riotously, and once again we have a story that ends on a note of loss which seems part of a larger destiny.(16)

彼らの存在により，Charlie の過去に対する複雑な心情と，彼がそれを抑圧しようとする感情が浮き彫りになっている[2]。

問題は，Charlie と過去の亡霊の関わり方だ。Charlie がなぜ住所を Duncan に教えたのか，そして，住所を教えたことをなぜ否定したのだろうか。久しぶりにパリのバーを訪れた際に，彼はバーテンダーに義理の姉である Marion の住所を渡し，それを Duncan に伝えるようにと依頼している。しかしながら，その Duncan が実際に Marion のアパートを訪れた時，彼はその訪問を想定していなかったような反応を見せる。Duncan が来た時の Charlie の様子から見て，彼が演技をしているようには見えない：“For a moment Charlie was astounded; unable to understand how they ferreted out the Peters’ address”（631）。これはつまり，彼が住所を Duncan に教えたことを本当に忘れてしまったということの証左となる。Charlie は，決して教えてはいけない住所を Duncun に自ら教えてしまった。しかしそれを，Gallo が指摘するように単なるミスや Charlie の愚かさとして処理しても良いのだろうか：“Learning that Duncan Schaeffer is in town, he foolishly tells the barman to give Duncan the Peters’ address”（103）。２名の侵入者が“ghosts out of the past”と呼ばれていることから分かるように，彼らは過去であり，過去の究極的な存在としての死者なのだ。この物語で死者が担う役割の大きさを考えれば，この場面を Charlie の単なるミスとして片付けず，彼らの存在に注目すべきではないか。つまり，彼が Duncan に無意識的に住所を教えてしまったのは，彼が過去を，そして死者を本心では拒む気がないからだろう。これが１つ目の疑問に対する回答となる。

２つ目の疑問，それはなぜ Charlie は住所を教えたことを忘れ去ろうとしたのか。従来の批評は，Charlie が過去との決別をできないことの証拠として挙げている。例えば，Davis S. Brown は“That Charlie should give this all-important address to such questionable company hints again at his inability to separate his old life from his new”（241）と指摘している。しかし，それは彼が死者の存在を抑圧しているからではないのか。彼が住所の伝達を忘れてしまっていたのであれば，それは彼の行為が無意識下に沈んでしまったことの証拠に他ならない。そしてその抑圧された死者は，彼の目の前に唐突に現れるのである。つまり，彼が Duncan に住所を教えたことを，そして死者との関係を無意識的に抑圧していることを指し示している。彼が無意識下で死者との関係を保とうとするのは，Duncan と Lorraine だけではない。彼は亡き妻である Helen とやりとりを

[2] 過去や死者の抑圧について，フィッツジェラルドがどこまで Freud の理論を意識していたのかは定かではない。しかし，Sarah Beebe Fryer によれば，*Tender is the Night* や“Babylon Revisited”には Freud の影響もあったようである。

> The influence of Freudian psychology on Tender Is the Night manifests itself through Fitzgerald’s effort to depict what he describes in his notes as a young girl’s “father complex.” Although Fitzgerald earlier reveals a Freudian awareness of “the injury that a father can do to a daughter” in his 1932 story, “Babylon Revisited,” his 1934 novel affords a far more vivid portrait of the dangers inherent in girl’s dependent relationships with fathers and father-figures (15).

行っている。そして，推測される妻の意思に基づいて行動しようとする。物語中盤で夢の中に登場し，彼を励ます妻の描写がまさにそうだろう(628)。また，物語の最後においても，死者の意思を推し量ろうとする Charlie の姿がある：“He was absolutely sure Helen wouldn't have wanted him to be so alone”(633)。Jonathan Schiff も指摘するように，彼の過去の行い，そしてその象徴的な存在である亡き妻の影響もあり，彼と死者達は切り離せない関係性にある：“Charlie Wales in 'Babylon Revisited' compares the living with the dead. In that story, Charlie feels guilt over the death of his wife”(52)。また実際に，過去の亡霊のみならず，Charlie はかつて自らが放蕩を尽くしたパリにも懐かしさを感じている。その様子から，Gallo は Charlie と過去の癒着を指摘する：“Charlie's purgation is far from over. There are so many subtle hints in the story that Charlie is not completely exorcised of his old life”(103)。死者達は Charlie に大きな影響を及ぼすと同時に，Charlie は彼らの存在を抑圧している。このように，物語中で死者の存在が重要な役割を果たしている。過去の出来事や死者との関係を拒絶することはできず，それが彼の行動や感情に影響を与えている。しかし抑圧されたものは，やがて回帰する。つまりこの抑圧された関係が，過去と死者が再訪される要因となっているのである。

2　“現在”に回帰しようとする死者 Charlie

ここまで私たちが見てきたように，Charlie は死者と深い関係性の中にある。それでは，逆に，なぜ死者達は Charlie を追い求めるのだろうか。それは，彼が過去の人物であることと相関関係にある。Charlie が娘の Honoria を必要とするのは，彼女が彼にとっての未来そのものだからだ。これは，現在の彼が未来を失ってしまっていることを意味する。未来への扉は，閉じられている。彼は過去に置き去りにされていると同時に，現在への回帰を目論んでいる。過去から現在に回帰し，その現在を橋頭堡にして未来への道を拓こうとする Charlie。Brian Way が指摘するように，彼は 2 つの世界に生きているのである：“For Charlie, the suddenness of the Depression has produced a sense of dislocation, a feeling that he is living in two worlds at once: he is committed to the idea of recovery and to the new way of life he has painstakingly created, but he still clings half-consciously to many of the mental habits which he formed during the Boom”(91)。それ故に，彼は過去の象徴でもあるパリのバーから離れることができず，何度もそのバーに戻ってきてしまう。この物語の始まりと終わりは，同じ場所が設定されている。Charlie は過去の象徴とも言えるパリのバーから離れることができず，この場所に戻ってきてしまう。物語の始まりと終わりが同じ場所で設定されていることは，この葛藤が解決されていないことを示唆している。Charlie の発言や娘に対しての行動からも，Fahey が指摘するように，彼が未来への移行を望んでいるのは明白だ：“For the story ends with Charlie forced to substitute sending Honoria 'a lot of things tomorrow' for the future with its affectionate relationship of a father and daughter living happily

together that seemed probable”(152)。その一方で，過去とのつながりを断つことができないことも明示される。さらには，バーテンとも同じ会話が展開され，彼がこの先も永遠と続く贖罪のための支払いに追われることが暗示されている：“He would come back some day; they couldn't make him pay forever”(633)。そして，この物語のオープニングで強調されているように，このバーは過去の人物達が回帰する場所なのである。Charlie とバーテンの会話を確認すれば，彼らの内容はバーやパリに戻って来た人たちや, 二度と戻って来られない人たちの話題に集約される。つまりこのバーは，いわば過去そのもの，過去的存在の集合点なのである。このバーの存在，そして円環状態のエンディングは，Charlie が未来を失い続け，死者から生者に移行することの難しさを示唆している。言い換えるならば，彼が娘の親権を手に入れることが既に絶望的であることを意味している。

未来を失ってしまい，過去に係留されている Charlie。Way も指摘するように，彼は過去に強い未練を感じている。

> He does not really want to meet them under any circumstances, and as soon as he sees them he knows they represent everything he is trying to forget, and yet, in obedience to old habit, he left Marion's address with the Ritz barman so that they could get in. touch with him. As he reflects on these trifling but fatal mistakes, he is forced to realize that recovery is not as simple a matter as he had thought: it is one thing to get back his health and his money; it is quite another to regain wholeness of being.(92)

放蕩の象徴であるパリに魅力を感じたり，Lorraine に一抹の未練を感じてさえいる。Rose Adrienne Gallo が指摘するように，彼はまだ過去を断ち切れていないのである：“Charlie's purgation is far from over. There are so many subtle hints in the story that Charlie is not completely exorcised of his old life”(103)。言い換えるならば，彼もまた死者なのだ。そう考えると，彼が“two years were gone, and everything was gone, and I was gone”(618)と言ったり，Marion から，「あなたは存在しないも同然だった」と宣告されている理由も明らかになる：“you haven't really existed for me”(625)。彼もまた，死者として描かれている。さらには，Charlie を家に迎えた時，Marion の服装は「喪服」であった：“Marion sat behind the coffee service in a dignified black dinner dress that just faintly suggested mourning”(624)。彼女の服装が意味するように，彼女にとって，Charlie は既にこの世には存在しないものなのだ。それゆえに，彼は“ghosts out of the past”から執拗に追われることとなる。過去の亡霊達は，Charlie の現在への抜け駆けを決して許さない。そしてまた, 妻の幻影からも彼は逃れることができない。過去にとりつかれている彼は，生者に戻れない。そう考えると，Marion が Charlie に極端に嫌悪感を示す理由も分かる。Charlie が“damn”と発言した時，Marion は極端な反応を示した(626)。“damn”には「永遠に呪

われる」と言う意味もある。彼女にとっては，呪われた死者である Charlie が発するこの言葉は恐怖以外のなにものでもないのである。

3　抑圧と境界線

このように, Charlie は死者として生きている。では, 生者と死者の違いは何だろうか。そして, 生者の世界になぜ彼は戻れないのか。そこで, 先ずは物語の冒頭に焦点を移したい。先述の通り, パリに戻ってきた Charlie は，以前足繁く通ったリッツのバーに旧友たちと会うために現れる。彼の過去を象徴するこの場所が，バーであることに注目したい。Seymour L. Gross も指摘する通り，このバーは Charlie にとっての時間の経過と現在地を指し示す存在でもある。

> The action of "Babylon Revisited" begins and ends in the Ritz bar. This structural maneuver is absolutely right, for the bar is one of the story's chief symbols of the relentless impingement of the past on the present, though it is not until the end of the story after Charlie's defeat, that it clearly takes on this signification. Indeed, ironically enough, Charlie's initial appearance at the Ritz seems to imply precisely the opposite: the apparent separation of the past from the concerns, needs, and desires of the present.(62)

そして，この場所でバーテンダーと繰り広げられる会話は，パリに戻って来た人物，戻って来たいが戻れない人物，そして追放された人物の話であった。この会話が指し示すのは，このバーが文字通り境界線になっているということである。過去と現在の間には境界線が存在し，このバーの場面がそれを示している。それでは，究極的な過去，すなわち亡霊や死者と現在や生者の境界線とは何だろうか。それを考えるにあたって，Charlie の過去にとって最も大きな出来事を思い出したい。それは，彼が大雪の夜に家のドアをロックし，妻を締め出したことだった。この事件によって，義理の姉である Marion と Charlie の関係性は決定的に崩壊した："Frankly, from the night you did that terrible thing you haven't really existed for me"(625)。そしてそれが，Charlie が娘の親権を失うことと直結している。つまり，彼が過去において妻を締め出したことが，この物語を駆動しているということになる。そして，他にも他者を締め出すエピソードがこの短い物語でいくつも見られるのである。先ずは，冒頭のバーでの会話。長い間ツケで飲食を提供されていた男性が不渡りを出してしまい，バーから追い出される話でこの物語は幕を開ける。そして，Lorraine の家に深夜に突如訪問し，ドアを叩き水を求めた泥酔状態の Charlie のエピソード。さらには，娘の親権を得ることに失敗し，Peters 一家の家から追い出される Charlie。これらの話に共通しているのは，全て過去のエピソードと追い出しが関係しているということだろう。過去がドアから侵入することを許し，迎え入れるか。それとも，拒絶し追い返すのか。バーやドアのエピソードが過去と直結している点に着目したい。

そして，過去が決定的に介入してくるのは，Duncan と Lorraine が Peters 一家に侵入する場面だ。彼らが侵入する前，Charlie はあと少しのところで Honoria との生活を回復できそうな状況だった。Honoria の親権を Charlie に譲り渡すことは拒否したものの，Charlie と Honoria が共に生活することに，Marion と Charlie は一度は合意していたのである。それを破壊したのは，過去の亡霊たちだった。Charlie からのメッセージによって，Peters 一家の家の在処を知った彼らが家に押し寄せる。そんな彼らを見て気分を害した Marion は，前言を撤回すると同時に Charlie との面会も拒否する。彼女の過去への態度は一貫している。過去のパリや Charlie を受け入れないのと同様に，彼女は過去の亡霊たちも拒絶するのである。こうして過去の亡霊たちは，彼が Honoria と共に生活するという希望，そして未来への希望も打ち砕いたのだった。このエピソードで象徴的なのは, Charlie が未来を手に入れようとした丁度その時に過去の亡霊たちが押し入って来る場面だろう。未来へ向けてのドアを開いた瞬間，その隙間から過去が侵入してしまう。この 2 つは同時に発生している。過去を押し留めた状態のままでは，Charlie が Honoria を，つまり未来を手に入れることはできない。Gallo が述べるように，過去は現在を捉えようとする：But, nonetheless, they are still there - vivid reminders of the old days - just as Duncan and Lorraine are there, ghosts from the past to haunt his present（103）。過去を拒否した状態においては，彼の下に未来は到来しない。すなわち，過去や死者を抑圧し拒絶するのではなく，受け入れることが未来を手に入れるための必須要件なのである。ドアを閉め切れば，つまり抑圧を継続すれば，過去の侵入を防ぎ切れるかもしれない。しかし，そのままでは未来の解放はままならない。Jeffery Berman が指摘する通り，過去は回帰する：The past returns to haunt him（79）。そして，それは一度限りではない。Charlie が抑圧を継続する限り，彼らは何度でも戻ってくるのである。Charlie は大きなジレンマ，いわば二律背反の状態に置かれている。

では，過去の侵入を阻止し，開放されたドアを塞ぐためには，何が必要になるのだろうか。穴について，Charlie が興味深いことを言っている：“Family quarrels are bitter things. They don’t go according to any rules. They’re not like aches or wounds; they’re more like splits in the skin that won’t heal because there’s not enough material.”（630）過去に生じた傷，つまり穴を塞ぐことはできない，なぜなら，そのための“物”がないからだという。まさにこれは，Charlie 自身について述べた事実だろう。彼は過去に犯した罪で，傷を作ってしまった。それを塞ぐための“material”がないという。傷口を塞ぐ物がないことから，過去を修復することはできない，という意味だ。つまり，一度開いてしまった穴は塞ぐことはできない。しかし，これを発言している Charlie 自身が，この意味を理解できているのだろうか。なぜなら，彼は“傷口”を治すために多くの物品を用いているからだ。彼は Marion やその夫の Lincon にプレゼントを贈っている。また，同様に娘の Honoria にもプレゼントを毎回渡している。Charlie が“He thought rather angrily that this was just money - he had given so many people money”（633），“they couldn’t make him pay forever”（633）と言うように，これら物品やカネの支払いは，彼の過去の罪に対する贖罪の目的がある。

しかしながら，Charlie に許しを与える立場にある Marion の見解は異なるようだ。過去の問題で生じた“傷口”を閉じることは可能だと彼女は言う：“It's a question of confidence”(630)。そのために必要なのは，物品ではなく信頼なのだという。過去に行ってしまったことの信頼を回復するためには，つまり，過去が侵入してしまうドアを塞ぐためには，信頼を得る必要があるという。信頼とは，過去の行為の積み重ねの結果得られる，未来への通行手形とも言い換えることができる。この通行手形を失ったためにパリのバーから未来永劫追放された人物がいた。そう，物語の冒頭で登場したリッツのバーを放逐された人物だ。彼は，ツケで飲み食いを重ねたのち，バーのオーナーに不渡手形を渡してしまったのだった：“And when Paul finally told he had to pay, he gave him a bad check”(617)。常連として店に通い続け，その結果，信頼を得ることができる。そして，ツケで，つまり，将来の支払いで飲食できる。これは，過去の信頼の積み重ねが未来へのドアを開くことを表したエピソードだろう。その反面，その信頼を失った結果，バーに入れなくなってしまったのである。Marion が Charlie に求めるものは，Charlie が考えているものと決定的に異なっているのである。Charlie が過去を抑圧する限り，彼と周囲との信頼は永久に構築されず，未来への扉は閉ざされ続けるだろう。

お わ り に

フィッツジェラルドの短編小説“Babylon Revisited”の主人公 Charlie の過去と未来の関係に，本論文は焦点を当ててきた。Charlie は過去の過ちから逃れようとするものの，その過程で過去の亡霊，すなわち死者達が彼の前に立ちはだかる。彼は未来への回帰を望み，娘 Honoria を通じてその可能性を追求するものの，過去と決別できず，その結果，未来への道が閉ざされたままであることが物語の最後に示唆される。過去との対峙や過去の過ちの受け入れが，未来への鍵なのである。このように死者や過去を抑圧し続けることは，信頼や新たな未来の機会を妨げる。その反面，信頼は過去の行動との相関性を持ち，未来への通行手段として彼の目の前に提示されている。未来に通じる扉に手を伸ばそうとする Charlie のもとには，過去の亡霊がこれからも絶え間なく再訪し続けることだろう。

Works Cited

Baker, Calros. “When the Story Ends: ‘Babylon Revisited’.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Ed. Jackson R. Bryer. Madison: U of. Wisconsin P, 1982. 269–77. Print.

Berman, Jeffrey. *The Talking Cure: Literary Representations of Psychoanalysis*. New York: New York UP, 1987. Print.

Brown, Davis S. *Paradise Lost: A Life of F. Scott Fitzgerald*. London: Belknap, 2017. Print.

Magnum, Bryant. *A Fortune Yet: Money in the Art of F. Scott Fitzgerald's Short Stories*. New York: Garland P, 1991. Print.

Lehan, Richard. “The Romantic Self and Uses of Place.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Ed. Jackson R. Bryer. Madison: U of. Wisconsin P, 1982. 3–21. Print.

Fahey, William A. *F. Scott Fitzgerald and the American Dream*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1973. Print.

Fitzgerald, F. Scott. “Babylon Revisited.” 1931. *The Cambridge Edition of the Works of F. Scott Fitzgerald: Taps at Reveille*. Edited by James L. West III, Cambridge UP, 2014. pp. 157–77. Print.

Fryer, Sarah Beebe. *Fitzgerald’s New Women: Harbingers of Change*. Ann Arbor: UMI Research P, 1988. Print.

Gallo, Rose Adrienne. *F. Scott Fitzgerald*. New York: Frederick Ungar P, 1978. Print.

Gross, Seymour L. “Fitzgerald’s ‘Babylon Revisited’.” *F. Scott Fitzgerald*. Ed. Harold. Bloom. New York: Chelsea House, 1998, pp. 61–71.

Malmgren, Carl D. “Revisiting ‘Babylon Revisited’: A Critical Retrospective.” *The F. Scott. Fitzgerald Review* 15(2017): 81–95. Print.

Noble, Don, editor. *Critical Insights: F. Scott Fitzgerald*. Pasadena: Salem P, 2011. Print.

Petry, Alice Hall. *Fitzgerald’s Craft of Short Fiction: The Collected Stories 1920–1935*. Ann Arbor: UMI Research P, 1989. Print.

Schiff, Jonathan. *Ashes to Ashes: Mourning and Social Difference In F. Scott Fitzgerald’s. Fiction*. London: Associated UP, 2001. Print.

Sklar, Robert. *F. Scott Fitzgerald: The Last Laocoon*. London: Oxford UP, 1967. Print.

Way, Brian. *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction*. New York: St. Martin’s Press, 1980. Print.